



つなぐ命

【栃木県】野澤美枝子 52歳

脳出血で倒れたAさん50代は、人工呼吸器で何とか命をつないでいた。Aさんの容体が悪化していく中、妻は医師に告げた。「先生、夫は臓器提供を望んでいました。夫の誕生日に一緒に署名したんです。最後の望みを叶えてください」と。

ほどなく脳死判定が行われ、医師からAさんの法的死亡が宣告された。妻の気持ちを守ると涙が溢れ、ただそばで見守るだけだった。最後の夜、ベッドを並べ互いの顔が見えるようにベッド柵を下ろした。妻は、Aさんの手を握り何度も顔を見つめそっと話し掛けながら夜を明かした。やさしげな表情で「もう死んでいるのに、心臓が動いているなんて不思議な感覚な

んですよ……」と話した。私は、その言葉に返す言葉が見つからず「生きてますよ……」、それだけを伝えた。すると、妻は天井を見上げ「そうですね。夫は、天国から見ていると思うの」とつぶやいた。

空が白み始めた頃、手術室に向かった。妻はAさんの手をさすりながら「もう少しだけ頑張って、もう少し」とやさしく声を掛け、ドアが閉まるその瞬間まで見送った。

手術を終えAさんが戻ってきた。その姿は、微笑んでいるような、何とも言えないとても穏やかな表情だった。妻は「がんばったね」、そう言うのと涙が溢れAさんの胸に顔を埋めた。

2人だけの時間を静かに過ごしていた。そのとき、Aさんの心臓が他の人の体で動き出したと連絡が入った。「良かった。本当に良かった」。妻の顔は一瞬で笑顔に満ちた。妻だけでなく関わったすべての人の心に一筋の光が放たれた瞬間だった。「ありがとうございました。Aの望みを皆さんが叶えてくれました。命をつないでくれた皆さんに感謝します」。そう言って自宅に帰った。

悲しみの中にも救われる命、つながる命。人が人を救う素晴らしさ、命のバトンの大切さを教えてくれたAさんと家族に心から伝えたい。「ありがとう。2人のつながった心はずっと生き続けますよ」。